「異邦人」にみられる不条理

村　島　実恵子

Albert Camus (1913年生れ) は Jean Paul Sartre と並んで第二次大戦後のフランス文学の活動に於ても政治言論活動に於ても多くの人々を啓蒙している。サルトルの巾広い作家活動が時にはフランスの知識人に誤解を与えたりしたのに対し，カミユの誠実な文体とその人柄が好感を以てフランス社会に受け入れられたようにみえる。文学者と云うよりはむしろ哲学者であったサルトルに比べ学生時代から文学的修練を深めたカミユの文体，思想はフランス文学に一つの方向づけをしたとも云えよう。

簡潔，明晰な彼の文章は現代人の感覚にあい，不条理と云う言葉はサルトルの実存主義と同じく戦後の若い人達に新鮮な感覚を呼び起した。

カミユは1913年11月7日かつての仏領アルジェリアの小さい町に生れた。煙草とブドーを産する人口約6千の町 Mondovi である。母はスペイン系，父はアルザス出身のフランス人労働者であった。父は彼の生れた翌年に世を去った為母の手一つで苦しい家庭環境の中で育ったカミユはブルジョワ出身の作家が多いフランス文壇では特異な存在とも云える。

彼は後年「私は自由を困窮の中で学んだ」と書いている。その為彼の作品には貴族趣味はなく，善良な民衆の生活に温かい共感があふれていることもうなずかれる。17才の時病いの床にあったカミユは文学に生きる事を早くも決意していた。すでにこの時不条理の認識が心に深く刻みこまれていたに違いない。

光きらめく太陽のアルジェリアで育ったカミユにはそこが彼の文化活動の中心でもあった。苦学して高校を終えた後アルジェ市の国立大学文学部

に給費生として入学し，新聞社でアルバイトをしながら哲学を専攻し1936年に大学を卒業した彼は自動車部品販売や測候所，市職員等と職業を替え乍らも文学と演劇の勉強を続けていったのである。

大学に在学中の1935年彼を中心にした「労働座」と云う素人劇団が作られており，カミユは一座の演出，脚色をしながら，自身舞台でも主演する等熱心に演劇活動を続けていった。

1938年一座が解散される迄の４年間の舞台に向けられた情熱は，後年発表された「カリギュラ」がすでに1938年に書かれていた事からもうかがい知ることが出来る。青年カミユは政治，経済，文化を含む全ゆる面でアルジェリアの文化活動を推進し，アルジェリアに二つの異質の文化，二つの異質の民族の融和による理想郷を作る意欲に燃えていた時代でもあった。

1957年のノーベル文学賞を受けたカミユの作品はそんなに多くはなく，「異邦人」，「ペスト」，「転落」，戯曲４篇「カリギュラ」，「誤解」，「戒厳令」，「正義の人々」及び「シジフォスの神話」等の評論集である。只カミユの云うロマン―長篇小説を書かない中に世を去った事は大変残念なことである。

「ペスト」を発表した1947年彼は34才であり，その10年後ノーベル賞を受けた事になる。カミユが自分の作品の発表を始めたのは戦中から戦後にかけてであり，1942年に発表した「異邦人」は文体とその内容が目新しく当時の青年の思想や傾向にぴったりしており，現代に於ける新しいタイプのユマニストとして共感を得たのであろう。

そう云う意味に於いてカミユは小説家，劇作家としてよりはむしろ思想家として読者の心をとらえ，新鮮な表現の文体が読む人を惹きつけたのであろう。特に「異邦人」にみられる文章の単純な中にも深い陰影があり，乾燥しているようでいてみずみずしい味わいを私達に与えてくれる。

カミユの思想は激しいものではなく，中庸と反抗を手段として社会に見られる不正，暴力に強く反抗しようと云う態度をとり続けてきた事である。

この考えは彼の生れ，生い立ち，経歴，社会的事情，歴史的事件と絡まり，その間の斗いから出発していると思われる。

そう云う意味でカミユは政治的にも中庸の立場をとり続けたが為に彼の反抗的理論も抽象的だと云われる所以であろう。しかし1956年のハンガリー事件，ナチズム，広島の原爆降下，インドシナ戦争に於いてもテロと暴力と不正に抗議して来たカミユはその方法を何の名において抗議するかではなく，正義，良心，人間の尊厳によって抗議してきた。

故に実際的な解決策や手段を示さなかったのであろう。それは彼の得意とする分野ではなかったとも云える。只文学者として思想家として抗議文を書いたり署名をしたりしたのである。事情が許せば政治的，社会的な事にかかわる事なく創作や芝居の演出をやりたいと云うのがカミユの本心ではなかったかと思われる。彼自身には自ら歴史に意味を与えると云う勇ましさや強さを表面に出す事は少なかったようである。カミユが貧しい人，虐げられた人に味方するのは彼の生い立ちから分るように，彼自身が植民地の貧しい家庭に生れ，父を早く失い，アルバイトし乍ら大学を出たからであろう。カミユは学生時代はフットボールの選手をしていた事もあったが，病を得て永い療養生活を与儀なくされ，大学での教授資格試験も放棄して了った。カミユの不条理の思想や反抗的手段も彼の健康に影響されているのではないかとも思われる。彼がアルジェの輝く太陽の明るさを愛し暗い感じのヨーロッパになじめなかったのも理解出来る。

永い二度の療養生活が彼に生と死の問題を真剣にとりくませる課題になったのかも知れない。生への絶望から生への愛も生まれてくる。カミユにとって何よりも大切なことは私達人間は生と死の矛盾の波間に生きることが運命づけられていると云う事であろう。

故にカミユの不条理の哲学はこのような矛盾，いろいろな対立の中で斗い乍ら反抗しながら生き続けなければならないと云うことである。人間は生と死の不条理の中に生き続けなければならないと云うのがカミユの根本

思想である。

「異邦人」はこの不条理を感覚的にとらえ，最後にこれを意識すると云うごく平凡なサラリーマンについてであり，大した動機もないのに殺人と云う非情な事を行い，機械的な裁判を受け，死刑の宣告をうける乾いた人間を鮮やかに浮き彫りにしている。筋は劇的なものではなく，主人公ムルソーの行動と自覚にどのような関連があるかを考えさせる物語であり，人物描写や心理分析をしたものではなくムルソーの存在はどんな意味を持っているのか，云わゆる人間存在はどの様な意味を持っているのかを書いており，平凡な生活を送り乍ら，他人に対して自己に対して異邦人であり続け，社会的通念や常識や道徳までも拒否し得る人間であり続け，全てに無関心であり続ける意味は一体何であるのかを私達に考えさせる鋭さがある。

カミユの思想と文学を支えているのは地中海的思想とも呼ぶべき自然と美と中庸，人間そのものであった。その中に不条理と反抗を絡ませ乍ら美を追求していたのである。どちらかと云えば暗い小説が多いけれど絶望の書ではないことは「異邦人」も「転落」でもよく分る。全ての人に罪の意識を認めさせる為に次々と故意に転落を重ねて行く弁護士クラマンスと，特に動機のない殺人をおかして死刑の宣告を受けるムルソーは人間の潔白さとは一体どんなものであるのか，誰が判断し得るのかと云う事を私達に問いかけてくる。そう云う意味でカミユは芸術家として歴史に参加しており，時代の不幸や悲惨に対して共感し続けた人であり，人間と人間の連帯を持つべきである事を強調している。個人の自由と責任に重点をおき，人間精神の進歩が科学に先行しなければならないと云うのが現代人に与えられた課題である事がカミユの作品を通して強く感じられる。

カミユの「不条理の哲学」は今迄のフランス文学とは異質の太陽と光の風土から生れた文学，哲学は永遠と絶対を求める人間と，全てが死につながるこの世界との間には不条理な関係しかないと云うこと，この不条理に

よって生じる意識の不安から逃れる為，哲学や宗教，形而上学的世界観，を作りあげて行ったとしている。

アルジェ市の地方新聞の記者として法廷における或る死刑宣告の場に立会った事で，死刑の非人間性を痛感し死刑廃止の論議を提唱した事があった。この死に対する思想が「異邦人」を生ませる素材となったと思われる。

「異邦人」は日本の文学界でも大いに論議された作品であった。即ちこれはカミユの言っているように「異邦人」を二部に分け，第一部ではムルソーの生活態度を示し，第二部で，同行為に対する社会人の態度を表し，それらが一つの悲劇にまでつながって行く事を表している。カミユは先ず自由人たる者自分に正直でなければならない，而も真実に仕えることは危険でもあり死をも賭した奉仕である。

平凡なサラリーマンであるムルソーの生活態度は人生の不条理を明瞭に意識している人間の見地であり，その人の眼を通して語られている独創性がある。即ち不条理を読者に感知させる事であり，私達を不条理の世界に接触させる事でもあり，人生に普遍的な意味を求めない為説明は一切されず透明ガラスの中で動く人間の姿から不条理を知らされるのである。謂わゆるムルソーの社会に対する無関心・社会常識への拒否——ムルソーが会社で上司にパリ転任の話を持ち出された時，何らの反応も示さなかった事，年老いた母を養老院に送った事で社会で言われる彼への悪口にも気がつかない事，埋葬される母の死顔を一目見ようとしなかった事，墓地に於ける彼の態度，全ては彼の興味外の出来事として眺め，友人達と海水浴に行った浜辺でたまたま預っていた友人のピストルでナイフを振りかざして来たアラブ人にピストルを使って死に至らしめ，遂には刑務所の中で様々の思いを壁の中に塗りこむ思いをし乍ら死刑執行が人間に唯一の興味ある問題と云う事に気付いて行くムルソーの不条理性を鮮明に描き出している。

人生に意味を感じ得ない未来も認める事が出来ない。ムルソーは愛と云う言葉に含まれる持続の観念を拒否し，彼の母や恋人に対する愛が習慣や

約束ごとで偽りのかたちをとることを拒否して行くのである。ムルソーが浜辺で熱い砂浜とぎらつく太陽から逃れる唯一の道として泉のほとりに辿り着き，友人のけんか仲間のアラブ人にナイフで切りつけられようとした時，預った友人のピストルをポケットよりとり出し無意識に引き金を引く事情は納得に苦しむ処であるが，強い武器を持つ結果が最大の悲劇をもたらす事は戦争を例に見るまでもなく歴史の上でも現実の社会でも――身近な交通戦争――日々感じさせられている事ではあるのに偶々身近になければ遠い出来事の様に感じる人間の持つ不条理性が無関心を装わせているのかも知れない。

参 考 文 献

Albert Camus：

L'ETRANGER

LA PESTE

CARNETS

LA CHUTE